



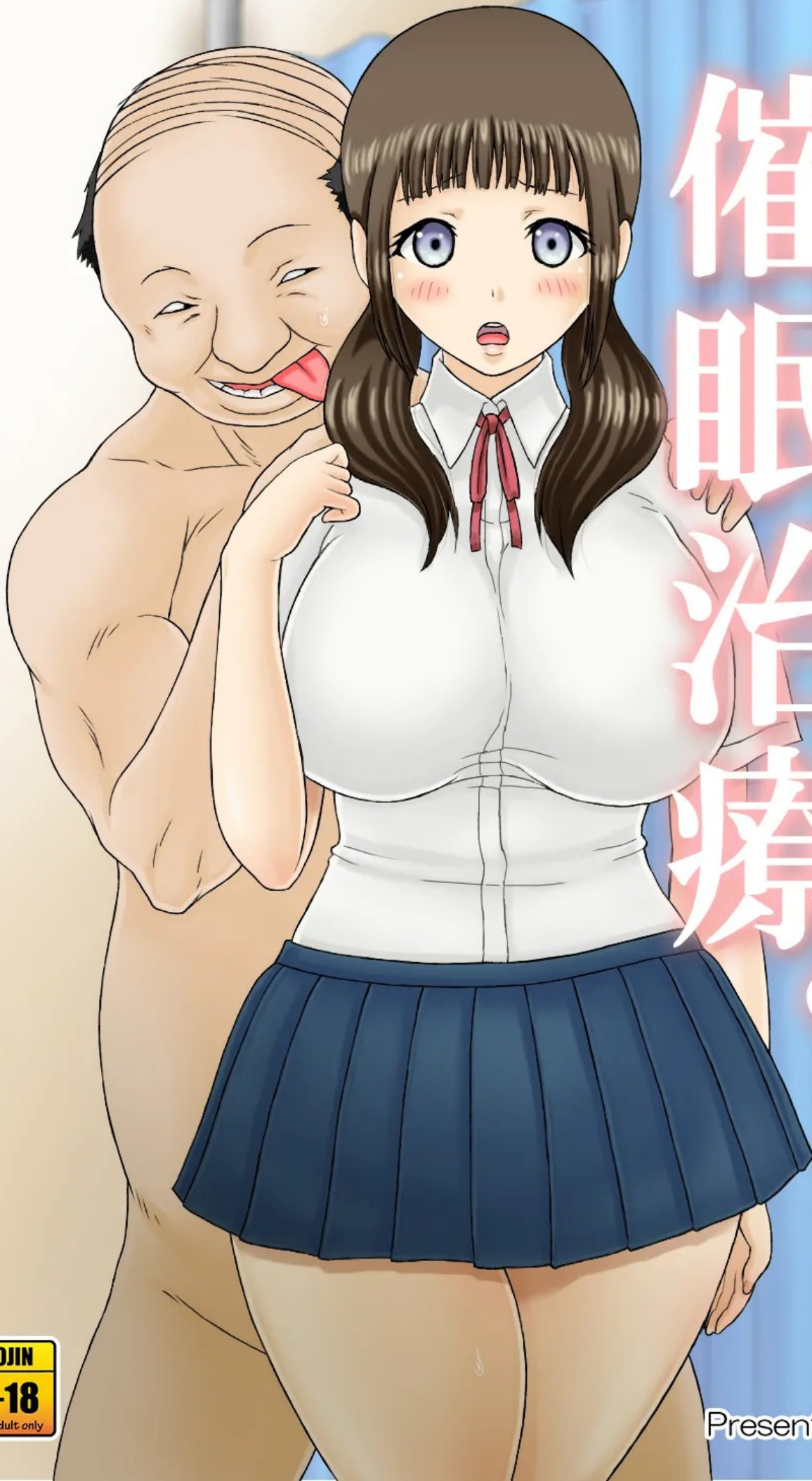
どすけべ  
催眠治療。

「…は、はい……実は私……男の人が…苦手で  
……普通に……話せないんです……  
それを、治したいと思って……」

DOJIN  
R-18  
for adults only

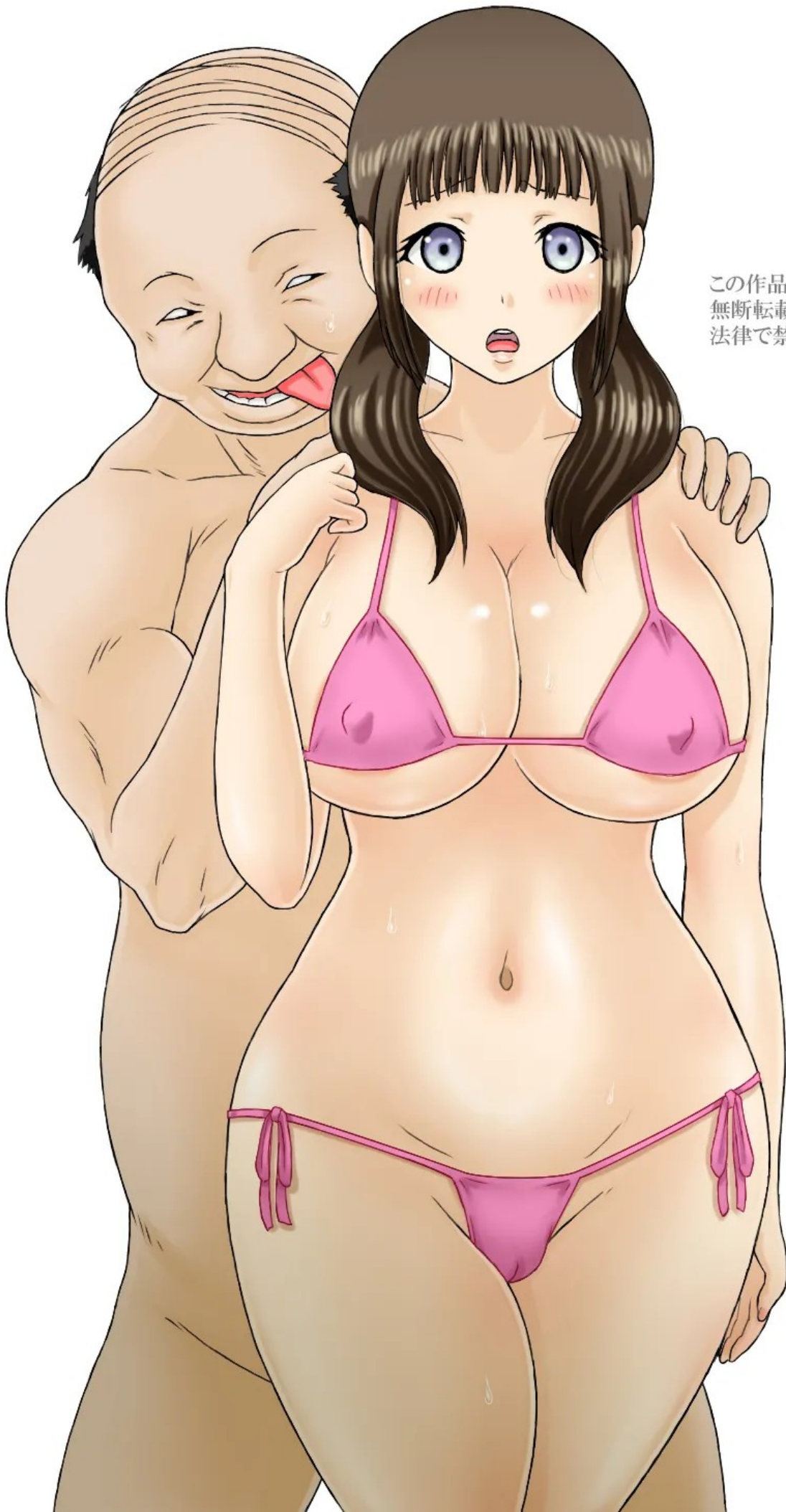
Presented by 慶人

どすけべ  
催眠治療。



DOJIN  
R-18  
for adult only

Presented by 慶人  
keito



この作品はフィクションです。  
無断転載・転売等は  
法律で禁止されています。

ある日の午後、花野結衣（はなのゆい）は、心療内科『阿吽クリニック』の診察室にいた。

「私が、医院長の阿吽吾郎（あうんごろう）です。……ええと、花野結衣さん…今日は、どうされましたか…?」

「は、はい……実は私……男の人が……苦手で……普通に……話せないんです……それを、治したいと思って……」

「なるほど……私と話すのは大丈夫ですか…?」

「は……はい……先生とは、何とか……話せるのですが……同級生とか、同世代の異性とは……難しい……です……で、でも……か……彼氏とか……いつか欲しいなど……思っ……て……あ……の……」

「なるほど、わかりました……それでは早速、治療していきましょう。男の人が平気になるようにね……」



「…さあ、これを見て下さい」

吾郎は、紐に吊るした5円玉を結衣の目の前に見せた。

「今からこれを揺らすので、目で追ってくださいね…」

（…えっ、こんなので治療するの…？）

結衣は、子供だましの様な方法に、強い疑念を抱く。

「…大丈夫ですよ、花野さんはいつの間にか男が平気になりますから…私に任せて…クククッ…」



プライン……プライン……プライン……

吾郎は、硬貨を揺らし始める……。

「……さあ……貴女は、男が平気になります……落ち着いて……リラックス……もう、男に何をされても平気ですからね……」

結衣は、5円硬貨を目で追った。

（……こんなので……一体何が変わるのかな……別に何も変わらない……変わら……）

「さあさあ……花野さんは、男が平気ですからね……男に何をされても平気なんですよ……さあ……」  
結衣の目が、トロンとしてきた……。



プライン…プライン…プライン……

5円硬貨は、吾郎の手で揺れ続ける……。

「さあ……花野さんは、男が平気ですよ……男に何をされても平気ですよ……」

(……もうそろそろ、効いてきたかな……)

「……わ……私は……男が平気……何をされても平気……」

結衣の意識はなく、いつの間にか催眠効果が現れ、吾郎の言う通りになっていた……。

「……………フフフフ、花野結衣ちゃん……君は催眠が効きやすいねえ……いや、結構結構……  
それでは、本当に男が平気になったか試してみようかね……クククッ……」

吾郎は立ち上がり、結衣に近づいた……。



「はあ……さつきから、このデカイ乳が気になってしょうがなかったんだ……」

そう言うと吾郎は、とてもJKの物とは思えない大ききの結衣の乳房を、触り始めた…。

フニツ…モミツ…モミモミツ……

「うへへ……結衣ちゃん……おっぱい大きいね……」

「……うん 私…胸大きいよ…あんツ」

結衣は、吾郎に対して自然に受け答える…。

（ぐひひ……こんな上玉の爆乳JK、何もせずに帰すかよ……もう俺の女にしてやるからな……ああ、カワイイなあ……）

実は吾郎は変態医師で、以前から気に入った女性患者に対して、こうして催眠治療を利用して性的な欲望を満たしていたのだ……。



「さあ、結衣ちゃん……俺とチュウしよう……チュー……ネチョ……レロレロッ……」

吾郎は結衣に唇を重ねると、舌を入れこみ結衣の口内を舐める……。

ピチャピチャピチャ……レロレロレロ……チャピッ……

「あっ……んっ……フゴッ……ああッ……ピチャピチャ……」

(フフッ……現役JKとのディープキス、ゲットだぜー……ああ、美味しい……)

吾郎がキスする間、二人の唾液が混ざり合い、結衣の口から涎が垂れるのだった。



「んはあ…はあっ…はあ…結衣ちゃんの唇、美味しい…結衣ちゃんはキスした事ある…?」

「…ん…初めて…」

「ぐへへえ…結衣ちゃんのファーストキス、もらっちゃった…じゃあ、服脱ごうか…  
脱がせてあげるね…」

「うん…服脱がせて…」

吾郎は、結衣の制服を脱がし始めた。



スリッ…シユルシユルシユル…スリリッ……

吾郎が制服を脱がすと、結衣は下着姿になった…。

「おお……結衣ちゃん、エッチな下着を着けてるね……良いよ…ぐへへ…」

「…うん…でも…私、△ネ大きいから、カワイイ下着は全然ないの……」

(なるほど……大きいサイズは、カワイイのが無いのか…胸が大きいのも悩ましいんだな……)

「だけど、結衣ちゃんはカワイイから、問題ないよ……フフッ…」

と言いながら、吾郎は結衣の爆乳を揉み続ける……。



「さあ、結衣ちゃん……ブラジャー外そうね……ハア……ハア……」

「うん……ブラ、外してえ……」

パチン……スルスルスル……シユルルツ……

結衣からブラジャーが外され、その見事な爆乳が露わになった…。

「おおっ……結衣ちゃん、デカイ……バスト何センチ…?」

「この前の身体検査で測ったら……103センチだった……」

「…ひやくさんツ……それは凄い……じゃあ、いっぱい揉んでおこうね……」

モシツ……モシモシツ……モシモシツ……



「はあ……結衣ちゃんのおっぱい、舐めるね……レロツ…チロチロツ…チユパツ…チユツ……」  
チユツ…ジュルツ…ジュプツ…ズツ…ププツ…ニチユツ…チユプツ……

吾郎は、結衣の乳首を舐めると、力強く吸い始めた……。

「……あっ……あぁッ……んっ……アハッ……あはッ……」

結衣は催眠状態の中、喘ぎ声をあげる……。

（こりゃ、見事な乳首だ……乳房に比例してデカイ……  
吸い応えあるわ……ンフフツ……）

ジュツ…プツ…ジュルルツ…ニユププツ…ズツ……

吾郎は、結衣の胸を堪能するのだった……。



「さあ、結衣ちゃん……ベッドの上に座って……」

結衣は吾郎にパンツを脱がされると、ベッドの上に座った。

「あっ……は、恥ずかしい……」

催眠状態でも、流石に全裸になると  
恥ずかしいらしい……。

「いやあ、結衣ちゃん……恥ずかしくないよ……  
結衣ちゃん、綺麗だよ……食べたくなるくらい……」

(ふひょー……たまんねえ……早くチンポ、突っ込みてえ……)

吾郎は、結衣の裸体を舐め回す様に観察した……。



「ぶひひっ……結衣ちゃんのアレ、よく見せて……んー、可愛い……ヒビッ…」

「ああ……はあッ……はあッ……先生、あまり見ないでえ……ハア……」

結衣は、引き続き恥ずかしがる…。

「フヒヒッ……大丈夫、もう男が平気なんだから……  
これからマンコ舐めてあげるからね……」

「はああ……ハア……ハア……ハア……」

（ああ……結衣ちゃんのマンコ……いただきます……）



「んちゅーっ……ぺろぺろぺろぺろっ……」

「はあんっ……あっ……はっ……ハアッ……」

ピチャピチャピチャ……レロレロレロッ……

(ああっ……JKのマンコ、美味えっ……結衣ちゃん……ペロペロッ……)

「あはっ……んんっ……んはッ……あっ……ああッ……アンッ……」

吾郎の愛撫により、結衣の女性器から愛液が滲み出てくる。



「あはっ……先生っ……そんな……ペロペロしないで……イツちやうっ……」

ペロペロペロペロッ……ジュルルルッ……ピチャピチャピチャ……

「あふあ……マンコ汁、ウマーっ……ピチャピチャ……  
結衣ちゃん……良いよ……ペロペロッ……」

(これは美味しい処女マンコ……これからゆっくり  
味わってやるからな……ブヒヒヒッ……)

「アッ……ンッ……アハッ……イヤッ……アアッ……ンハッ……」

結衣は、意識のないまま喘ぎ続ける……。



「ソーツ…アアツ…アンツ…イク…イクツ…イツ…ああアツ…」  
「ビシユツ…フシユツ…ジヨボボボ…」

結衣が声にならない声をあげると同時に、膣から潮が吹き出た。

「ンハハハツ…結衣ちゃんのマンコっ…潮が吹き出た…  
ンゴクツ…ゴクゴクゴク…ぷはあ、こりやたまらん…」

(結衣ちゃんのJK処女マンコジュース…めっちゃ美味いわいッ…)

顔にかけられながら、吾郎は結衣の潮を悦んで飲むのだった…。



「さあ、結衣ちゃん……今度は俺のペニスをしゃぶろうねえ…ククク…」

吾郎は、結衣の顔のすぐ傍に勃起したペニスを近づける…。

(…結衣ちゃんの身体に触れ続けて、もう勃起が治まらない…)

「はあ…はあ…はあ…ああ…」

結衣は、すぐ横にあるペニスを感じとったが、何も反応しなかった…。



「結衣ちゃん…チンポを口に入れるから、噛んじゃだめだよ…ほおら…」

ムチュツ…ズブズブツ…ヌプツ…

吾郎の巨大なペニスに、結衣の口いっぱい広がる…

「…ムググツ…ふむう…ンッ…ヨクッ…んべっ…」

結衣は一方的に入れられるペニスに、苦しそうである…



「はああ……結衣ちゃんの口マンコ……気持ちいい……このまま動かすから唇で啜えてね……」

「うん……うん……フゴツ……ンチュツ……チュプツ……チュプツ……」

吾郎は、結衣の口の中のペニスを動かし始める…。

(こ…これは気持ちいい……ゆ、結衣ちゃん……も、もう出したくなってきた……)  
チュプツ…チュプツ…チュツ…チュプツ…

快楽と興奮により、吾郎のペニスの動きが早くなった…。



「ああッ……結衣ちゃん……もうイクッ……イクねッ……結衣ちゃ……アアッ……！」

フシユツ……ドピユツ……フピツ……フシユシユウツ……！！

「ウゲッ……フウッ……んっ……ンゲッ……ゴホッ……ンガッ……！」

「はあッ……はあ……ハハッ……結衣ちゃんの口に、思わず出してしまったよ……ハハハッ……」

（ああ……気持ち良かった……まさか、結衣ちゃんの口マンコが、こんなに俺のペニスにジャストフィットするなんて……はあ……良かった……）

吾郎はあまりの気持ち良さに、結衣の口腔内に射精した。だが、いきなり射精されたので結衣は、その精液をほとんど吐き出してしまったのだった……。



「……さん……花野さんっ……聞いてますか……？今日の治療は終わりですよ……花野さん……」

「えっ……あっ……先生……？……も、もう終わりですか……あれっ……？」

結衣が気付くと、治療は終わっていた……だが、5円玉を見ていた以降の記憶が定かではなかった……

「……はい、今日はもう終わりです……また明日来て下さい……」

「あ……はい……ありがとうございました……」

(……ふう……服を着せるのが大変だったが……今日はこの辺で良いだろう…………続きは、また明日の楽しみだ……ククク……)

結衣が帰って行く後ろで、吾郎は今日のプレイを思い出し、ほくそ笑んでいた……。



次の日も、結衣は阿咩クリニックに来た。この日は、更衣室で渡された水着に着替えている所だった。

「水着ってどんなのたる……？」

渡された水着は、紙袋に入っていてまだ様子が分からない…。



（…まあ、良いか……治療の為だもんね……）

結衣は、何の疑いも無く着替え始めた。

スルツ…シユルシユルシユル…スリリツ……

結衣は更衣室で一人、裸になる……。

「…最近、少し太ったかな……お菓子ばかり食べてるからなあ……でも、美味しいのよね……」  
自分の身体に付いている肉が、気になる様だ。



「……花野さん、準備はできましたかな……？」

隣の診察室から、吾郎の声が聞こえる……。

「あっ……はいつ……今、着替えてる途中で……もう少し待って下さいっ……」

結衣は、慌てて水着を着ようとする。

結衣は、身に着けた水着を見て、愕然とした。

「な…何、この水着…ほとんど裸じゃない…こんな着て、男の人の前に出られない…」  
「…花野さん、そろそろ良いですか…?」



吾郎の、催促の声が聞こえる。

「あっ…は、はい…今行きます…」

「…これも…治療の内だから…」

結衣は、意を決して診察室に向かった…。

「……お待たせ……しました……」

結衣は、吾郎の前の椅子に座った。

「ほうほう……花野さん、良く似合ってますな……大きい胸も強調されて良いですぞ……クククツ……」



「……はい、ありがとうございます……」

（あれ……先生に見られても、全然気にならない……）

「どうですか……治療が効いてるんじゃないですか……？」

「……は、はいっ……先生と普通に話ができるし、水着姿見られても全然平気……」

「それは良かった…じゃあ今日は、もっと男と仲良くなれる様にするから……昨日と同じように、これを見てね…」

「はい、宜しくお願いしますっ……」

（私、男の人と普通にお話してる……）

（くくく……今日は、結衣ちゃんの全部をいただくか……）

「今から揺らすから、よく見ててね……」

吾郎は、昨日と同じように5円硬貨を揺らし始めた…。



プライン…プライン…プライン…

「さあ、花野さん…花野さんは、もう男が平気ですよ…男に何をされても平気ですよお…」

（お、私は…男の人が平気…男が平気…）



「そうそう…リラックスしてね…花野さんは男が平気ですよ…むしろ、男が好きですよお…」

（私は…男が平気…男が好き…男が…）

「花野さんは、男がとても好きですよ…花野さんは、阿咩吾郎がとても好きですよお…」

(私は、男が好き……先生が好き……)

プライン…プライン…プライン……

吾郎の硬貨は揺れ続ける……。

「…私は、吾郎の女ですよ……吾郎の肉便器ですよ……」

「……私は、先生の女……先生の肉便器……」

「…フフツツ、そろそろ良いかな……さあ、結衣ちゃん……またベッドに行こうね…フフツツ……」

吾郎は、催眠にかかった結衣を、診察ベッドに連れて行った…。



吾郎は、裸になってベッドの端に座り、結衣の爆乳でパイズリをさせる…。

「そうそう…上手いねえ、結衣ちゃん…そのまま、おっぱいでチンポを擦って…。」

「うん…オチンポ、大きい…はあ…は…」

グニニツ…ヌルツ…ヌツ…ヌツ…ヌルツ…

(おおッ……結衣ちゃんの爆乳…温けえ……気持ち良い……可愛いなあ……)

吾郎は、一生懸命パイズリをする結衣から、目が離せなかった…。



「そのまま、チンポの先を舐めて……結衣ちゃん……はあ……ハア……」

「うん、分かった……ペロペロペロ……レロレロ……」

吾郎の言う通り、結衣は亀頭の先を舐める……。

「うおツ……刺激が強くなって……キモチい……アアツ……ハアツ……はあ……」

「はあ……ハア……先生のオチンポ……舐める……ペロペロペロツ……」

（な……なんて可愛い肉便器なんだ……結衣ちゃん……もう、メチャクチャにしたい……）



「結衣ちゃん、もう水着脱ごうねえ……俺が脱がせてあげるから、そのままパイズリしててね……グへへへッ……」

「あ……うん……ペロペロペロ……レロレロレロ……」

ススツ……スルスルススツ……シユルツ……

吾郎は、結衣の水着を取り去り、結衣は裸になった……。

「ああ……結衣ちゃん、可愛い……いっぱい可愛がつてあげるねえ……フヒヒッ……」

そう言って吾郎は、パイズリする全裸の結衣の身体を触りまくるのだった……。



「あつ…ゆ、結衣ちゃん…出る…出すよツ…顔に…アアツ…！」

ドピュツ…ドピュツ…ピユクツ…ドピツ…ピユルツ…ピツ…！」

「あつ…アアツ…アツ…ん…あはっ…！」

吾郎にいきなり射精され、結衣は無意識ながら戸惑っている…。

「はあ…はあ…はっ…結衣ちゃんのパイズリ…最高…気持ち良い…毎日やってもらおう…はあ…！」

吾郎は結衣のパイズリでイカされ、悦に入っていた…。



「さあ、結衣ちゃん……ベッドの端に四つん這いになって、お尻をよく見せて……」

「はい……先生、私のお尻……よく見てえ……エへへ……」

結衣は四つん這いになって、吾郎に向かってお尻を向ける……当然、女性器も丸見えになった。

「グホホッ……結衣ちゃん、オマンコ可愛いよお……もっと、お尻を振ってみて……」

「こお……先生っ……フリフリい……」

結衣は、お尻を左右に振る。

(ゆ、結衣ちゃん……何てエロいんだ……も……もうチンポが、復活してきた……)

グニニニニニッ……

吾郎のペニスが、再び勃起した……



「はあッ……結衣ちゃん……ハア……」

吾郎は、勃起したペニスを  
結衣のお尻の谷間に擦り付ける…。

「あはっ……先生オチンポ、私に  
擦り付けてる……やあんっ……」

ズッ……ズッ……ズッ……ズッ……

（ハアッ……ハアッ……ハッ……  
これだけでも、気持ち良い……ハア……  
でも、オマンコはもっと気持ち良いん  
だろうな……ハアッ……）

「結衣ちゃん……そろそろセックス  
しようねえ……グへッ……」

吾郎は、ペニスを  
膣に押し当てた……。



グニニニツツ…ズルルルツツ…ヌプツツ…

「あつ…アアツツ…アツツ…  
オチンチン、入ってきた…ああツツ…」

初めて膣内に侵入するペニスに  
結衣は催眠状態ながら、驚きを  
隠せない様である…。

（初めての挿入の所為か、流石に  
狭いな…キツキツマンコだ…）

「はあつ…はあ…ハハハ…  
結衣ちゃん、入っちゃったねえ…  
痛くない…？大丈夫…？」

「はっ…んっ…だ、大丈夫…はあ…  
はっ…アアツツ…」

結衣は、吾郎にペニスを入れられ  
興奮しながら固まってしまった。

「じゃあ、動かすからね…  
結衣ちゃん…フフフツツ…」



ヌプツ…ヌプツ…ヌプツ…ヌツ…

「あっ…んっ…あはッ…アッ…  
やあんッ…アンツ…ア…アハッ…」

結衣は初めての性交に、喘ぎ声を  
あげる…。

「ああ…はあっ…結衣…ちゃんの…  
マンコ…狭いけど…気持ち良い  
…あっ…はっ…はアッ…」

（ああ…結衣ちゃん…マンコ  
良いわ…ヌルヌルで良い具合に  
締め付けてくる…はああ…）

ニュップ…ニュプツ…ニュプツ…  
プツ…ニュチュツ…ヌプツ…

「あっ…ンツ…はっ…アハッ…あんッ…  
アッ…き…きもちいいッ…あはンツ…」

結衣の膣は愛液で十分濡れており、  
吾郎のペニスがスムーズに  
出入りするのだった…。



ヌプツ…ヌプツ…

ヌチュツ…プツ…

「さあ、こっちに来て  
結衣ちゃん……グへへッ……」

ズイツ……グググッ……

吾郎は、結衣の身体を強引に  
引き寄せる……

「ああんツ……あッ……アッ……アアッ……！」

吾郎は結衣の両腕を掴んで、後ろから犯すのだった。



ニユプツ…ニユプツ…  
ニユチツ…ニユチユ…

「ああんツ…アアツ…アツツ…  
アツ…アハツ…アアツツ…」

吾郎の巨大ペニス、結衣の  
子宮の入り口まで  
届いていた。

「はあツ…ハアツ…結衣ちゃん、分かるよ…はあ…  
結衣ちゃんの奥まで届いてるの…ハハツ…このまま  
子宮に直接出すからね…ハアツ…ハアツ…ハツ…」

ズチヨツ…

ヌチヨツ…ヌツ…

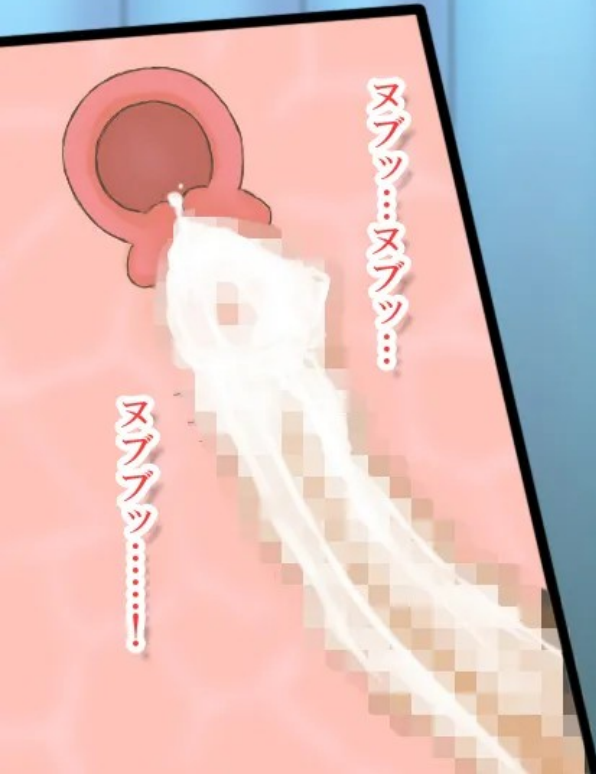
「ハアツ…ハアツ…  
ハアツ…アハツ…アハンツ  
…アツ…イツ…イクツ…  
オチンポツ…イツちやうつ…アツ…」  
ヌチュツ…ヌチュツ…ヌチュツ…

結衣は、催眠状態でイキそうになっていた…。

「はあツ…ハアツ…アツ…俺もイキそうになってきた…ハア…」

ヌフツ…ヌフツ…

ヌフフツ…!!



「ああッ…結衣ちゃんっ…  
イク…イクぞっ…結衣っ…  
あっ…アッ…アアッ…!!!」

ドビュッ…ビュルルッ…ビュクッ…  
ビュッ…ビュルッ…!!!

「ああッ…んっ…熱いっ…のが…出てるッ…アッ…  
アハッ…アハッ…アハッ…アハッ…!!!」

ドビュッ…!!!

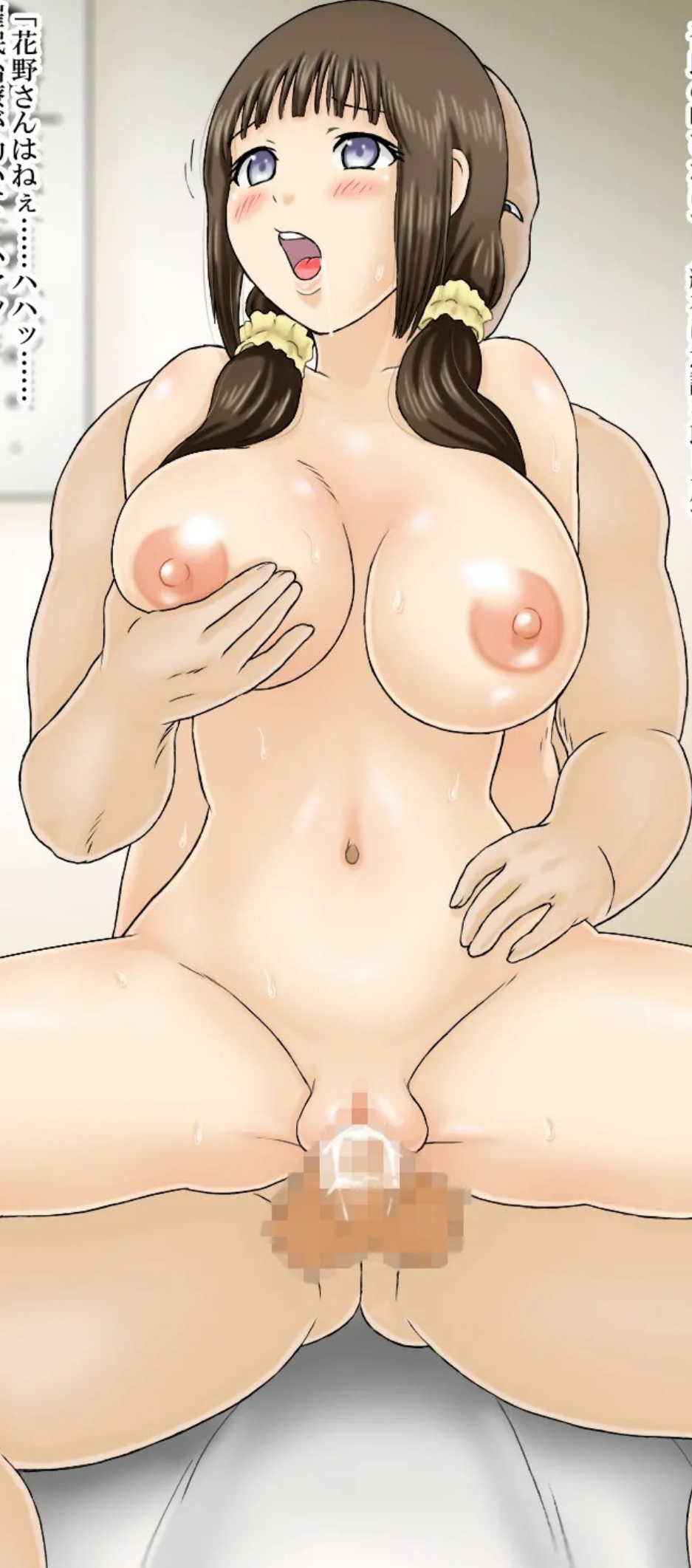
ビュルルッ…!!!



「花野さん…花野結衣さんっ…はあ…ハアツ…そろそろ起きて…はあッ…」

「ハアツ…ハアツ…はっ…えっ…あっ…何これ…アアンツ…アツ…」

吾郎の呼びかけで、結衣は意識を取り戻す……。



「花野さんはねえ……ハハッ……  
催眠治療が効いて…ハアツ…  
男が好きになったんですよ…それどころか、こうして俺とセックスまでしてる  
……俺の事、好きでしょう？…ハッ…ハアツ……」

「あっ…シツ…嫌じゃ…ない…アアンツ…先生…好き…アアンツ……」

「ハアツ…ハアツ…花野さんは彼氏が欲しいって言ってたから…俺が彼氏になってあげますよ…ハアツ…良かったね、結衣っ…」

「アアツ…んっ…カレシ…嬉しい…先生が、私の彼氏っ…アアンツ…」

吾郎の催眠治療で、結衣は完全に吾郎の女にされてしまった…。

「じゃあ、結衣…これから毎日…ハア…種付けセックスするからな…孕ませてやる…ハアツ…」

「はあツ…せ、先生の子供っ…私、作るうツ…アハツ…アアンツ…」

吾郎は、ピストンのスピードを早くした…。

ズブツ…ズブツ…ズブツ…



ジユポツジユポツジユポツジユポツ……!!

吾郎のペニスが、結衣の子宮を貫く…。

「アアツツ…アハアツツ…オチンポ、ぎもぢ良いイ…  
やあッツ…アツツ…アハア…」

（わ、私っ…男が平気になって  
セックスまでしてるう…すごい…  
先生、好き…ああッ…）

「アアツ…ハアツ…結衣はカワイイなっ…また出すぞっ…アツ…アツ…ハアツ…」

吾郎のペニスの先から、今にも出そうと精液が漏れてきた…。

ズツ…ズツ…ズツ…ズツ…



「アアツ…結衣い…イク…イクぞお…アアアツ…！」

ドビュルルツ…ビュルルツ…ビュツ…プリュツ…ドピピツ…ピツ…！」

「あハアツ…アツ…ハツ…あひいッ…アンツ…しえんしええの…アアツ…出てのゆッ…アアン…良いイ…！」

「シフフツ…じゃあ、もう一発くらいヤろうか…結衣…！」

（アアンツ…男好き…先生好き…チンポ大好き…  
中出しSEXだあい好き…アハツ…）

この日から結衣は、吾郎の女になり肉便器になった…。そして毎日  
中出しSEXを楽しんでいるという…。

ビュルルツ…フビュルツ…！」





お買い上げありがとうございました。

